

李賀に於ける「門」の描写

—空間的側面からの考察—

一、はじめに

空間を厳密に定義することは困難であるが、ここでは「人間の生が展開される場」というほどの意味として用いたい。人間は、この世に生を受けた瞬間から、身体を通して空間の一部に組み込まれている。人間の生は空間との関わりなくしては成り立ち得ず、「たとえ思考のなかであっても空間から解きはなされることはできない」^①。

中唐の詩人李賀（七九一—八一七）が、空間とどのように関わり、また空間をどのように捉えていたのかを考察して行くなかで、李賀の生の形式を浮き彫りにして行きたいというのがこの論の大きなテーマである。が、限られた紙面の中で、李賀詩に描かれた全ての空間を検討する事は不可能である。ここでは「門」に対する考察を中心に論を進めて行きたい。

「門」は、李賀の空間意識を探る上で、なくてはならない

河田 聡 美

視点の一つである。なぜなら李賀詩に於て空間は、「門」—殊に家屋の門を中心に、決定的に対立する二つの領域に区分されているからである。李賀は自己共に認める才能を抱きながら、一部の人間の害意によって科挙受験を阻まれ、社会的生命を断たれた詩人である。彼にとって社会は悪意に満ち、自分の能力を否定し、只騒々しいばかりの空間であった。李賀はこうした社会を自分の側からも拒絶して、家屋の内に閉じられた自分だけの空間を築こうとする。「門」の描写を追い求めて行く事は、社会という空間と格闘し、追い詰められて行った李賀の人生を追う事にもなるのである。

二、「門」の用例と分類

漢和辞典を引けば一目で解る事であるが、「門」には「①かど。もん。②物事の入口。③いえ。いえがら。④みうち。」等、実に様々な意味がある。が、家屋をテーマとし

たこの論では、①の意味で用いられた「門」の用例にのみ注目して行きたい。

中国建築の基本は「四隅に木の柱を立てて土壁で囲み、正面を四本の柱で三つの間隔に仕切った一階建」である。故に家屋は、周囲を取り囲む外壁によって「大きな一般的空間から特別な私的空間」を完全な形で切り取る事となり、唯一の開口部である門が閉ざされれば、何人たりとも家屋に侵入する事はできなくなる。例え門が閉ざされていても、庭から入り込む事のできる日本家屋との相異はここにある。門には閉鎖性と透過性という二つの機能があるが、建物の唯一の開口部である中国の門には、その機能がより完全な形で体现されていると言えよう。

「門」の用例を、その機能に注目して分類すると次のようになる。

- A 門の閉鎖性に注目した表現
- B 門の透過性に注目した表現
- C その他

李賀詩に於いては、李賀自身との関わりの中で描かれた門の描写と、そうでない門の描写、例えば秦宮の豪華な生活綴った『秦宮詩』等に登場する門の描写との間には大きな隔りがある。李賀と門との関わりをより純度の高い形

で抽出するために、先ずは前者の門に限って考察を進めて行きたい。具体的には、作者自身の門の出入りの他に、友人を長安の門外に送る、他者が作者の門内に入る等、作者との直接的な関わりの中で描かれた門の描写を考察の対象としたい。

李賀詩には、①の意味で用いられた「門」の用例が三十九（詩題の三例はこの内に含まれない）。その内、李賀自身との直接的な関わりの中で描かれた「門」の用例は九。先に示した分類に従えば、Aが二例、Bが七例、その内分けるは左記の通りである。

- A ① 衙回自閉門（『始為奉禮憶昌谷山居』卷一）
- ② 閉門感秋風（『秋涼詩寄正字十二元』卷三）
- B ③ 東牀卷席罷、護落將行去、秋白遙遙空、日滿門前路（『將發』卷三）
- ④ 柴門車轍凍、日下榆影瘦、黃昏訪我来、苦節青陽皴（『贈陳商』卷三）

- ⑤ 発勒東門外（『春婦昌谷』卷三）
- ⑥ 入門媿家老（『春婦昌谷』卷三）
- ⑦ 入門下馬氣如虹（『高軒過』卷四）
- ⑧ 驅馬出門意（『京城』卷四）
- ⑨ 竺僧前立當吾門（『聽穎師彈琴歌』外集）

李賀と同時代の詩人、韓愈・孟郊・盧仝・賈島の詩の中から同条件で「門」の用例を抽出すると、韓愈（全唐詩卷三三六―三四五）三十一例、孟郊（全唐詩卷三七二―三八一）十二例、盧仝（全唐詩卷三八七―三八九）六例、賈島（全唐詩卷五七一―五七四）十四例。李賀も含めた五詩人の「門」の用例を表にしてみると次のようになる。^⑥

	李賀	韓愈	孟郊	盧仝	賈島
A	2	5	0	2	0
B	7	20	7	2	7
C	0	6	5	2	7

右の表を見て先ず気づくのは、韓愈・孟郊・盧仝・賈島の四詩人が、B項に次いで多くの用例を割いているC項に、李賀詩の用例が一例も見い出せないという点である。

門の描写の中には、閉鎖性（A）と透過性（B）という機能面からだけでは割り切れない描写（C）もたくさんある。例えば「秋至老更貧、破屋無門扉」（孟郊『秋懷』其四、全唐詩卷三七五）では、建物としての門を描く事に重

点が置かれているし、「山人門前徧受賜、平地一尺白玉沙」（盧仝『苦雪寄退之』全唐詩卷三八九）では、門は単に場所を特定するものとしてのみ立ち現れている。こうした門の用法は我々が日常的に使う範囲のものであり、孟郊・盧仝・賈島がC項に三分の一以上の用例を割いているのも、その意味では当然である。むしろC項に該当する用例を一例も持たず、機能面にのみ注目した門の描写を行う李賀の側に、日常性を欠いた強烈な意識の偏りがあると見て良いであろう。

三、門の閉鎖性に注目した表現

a、李賀の場合

李賀にとって、門とはどのような存在であったのか。先ずは門の閉鎖性に注目した表現から見てみたい。

⑥ 始為奉礼憶昌谷山居

掃斷馬蹄痕 掃斷す 馬蹄痕

衙回自閉門 衙より回りて自ら門を閉づ

長鎗江米熟 長鎗江米熟し

小樹棗花春 小樹棗花の春なり

向壁懸如意 壁に向ひて如意を懸け

当簾閱角巾 簾に当りて角巾を閲す

犬書曾去洛 犬書曾て洛を去り

鶴病悔遊秦 鶴病 秦に遊ぶを悔ゆ

土甌封茶葉 土甌 茶葉封じ

山杯鎖竹根 山杯 竹根を鎖す

不知船上月 知らず 船上の月

誰棹滿溪雲 誰か滿溪の雲に棹す

葉葱奇編訂『李賀詩集』卷一

科挙受験を阻まれた李賀はいったん故郷に帰るが、翌元和六年（八一―）に再び上京して奉礼郎となる。しかし、出世の望が薄い奉礼郎という官は、才能を自負する李賀の氣にそまず、「長安有男兒、二十心已朽」（『贈陳商』）と嘆かせた挙句に、元和八年、病を理由に官を辞するまでに李賀を追い込んでしまふ。右は、李賀が奉礼郎になったばかりの頃の作品である。

冒頭二句には、掃除・閉門の全てを自分で行わなければならない長安での貧乏生活と共に、門を閉ざす事によって家屋の内―内的世界―に閉じこもろうとする李賀の姿が描き出されている。氣の進まぬ役所勤めから帰った李賀が真先にするのは、家屋の外から内への侵入の痕跡（馬蹄痕）をきれいに消し去り、ピタリと門を閉ざして外的世界―長安の官僚社会を中心とした社会的空間―を締め出すという作業であった。先ず家屋を閉じた空間として完結させ、そ

の中で自分を除々に取りもどして行こうとする李賀。グツと煮え始めた米の匂いと暖かさ（長鎗江米熟）は、李賀の心をほんのりと和ませてくれる。庭に植えられた棗の木のか細さ（小樹棗花春）は、長安生活の不毛さを象徴するかのようであるが、それでも棗の白い花は、一時李賀を人間社会の猥雑さから引き離してくれる。身繕いをする李賀を取り囲むのは、一人きりの静かな空間（向壁懸如意、当簾閱角巾）。役所帰りの心の苛立ちは何時しか静まり、彼の心は故郷の家屋へと吸い寄せられて行くのである。故郷の家族へ出した手紙（犬書曾去洛）。病を押してまで上京するのではなかったという後悔（鶴病悔遊秦）。故郷の家屋に残して来た茶や酒盃（土甌封茶葉、山杯鎖竹根）。そして最終的に李賀の心を満たしたものは、「月の光の下、空の雲をいっばいに映しとった川面を漂う船」の情景であった（不知船上月、誰棹滿溪雲）。李白に「待吾尽節報明主、然後相攜臥白雲」（『駕去温泉宮後贈楊山人』其四）という句があるように、雲には隠棲の場としてのイメージがある。隠やかで満ち足りた心情と共に、清々しい解放感をたたえた結びの二句は、精神的には已に世俗から切り離されてしまっている李賀の心象風景であると共に、李賀の隠棲への憧れを映したものでもある。長安の家屋だけでは、

李賀の精神をここまで解放する事は不可能である。長安の家屋で夢見る故郷の家屋。長安での李賀は、この二重の家屋に抱かれる事によって始めて、真の解放と安らぎを得る事ができたのである。

李賀は、故郷昌谷（河南省宜陽県の西）の家屋に於ても

「閉門」の描写を行っている。

⑤閉門感秋風 門を閉じて秋風に感ず

幽姿任契闊 幽姿 契闊に任す

大野生素空 大野 素空生じ

天地曠肅殺 天地 曠として肅殺

露光泣残蕙 露光 残蕙泣き

虫響連夜発 虫響 連夜発す

房寒寸輝薄 房寒く寸輝薄し

迎風絳紗折 風を迎へて絳紗折る

披書古芸馥 書を披けば古芸馥しく

恨唱華容歇 恨唱 華容歇く

百日不相知 百日 相知らず

花光變涼節 花光 涼節に變ず

李賀詩集卷三

右は『秋涼詩寄正字十二兄』の前半部分。病を理由に奉礼郎を辞した元和八年秋の作である。『始為奉礼憶昌谷山

居」と同じく詩の冒頭に持って来られた「閉門」の描写は、詩の構成面からも門外空間を締め出そうとする李賀の強い意志の表れである。門を閉ざし、家屋の内に閉じこもった李賀にとって、門外の空間は最早無縁の存在である。漠然とした死のイメージ（肅殺）と共に、只白く広いばかりの空虚な空間として描かれた門外の空間（第三十五句）。

この空間描写は、「閉門」という行為によってもたらされた、門外空間と李賀との精神的断絶感の象徴であると共に、李賀が門外空間に対して抱いているそこはかといふ恐怖心の表れでもある。先に見た『始為奉礼憶昌谷山居』では、それが更に徹底されて、「閉門」の描写以後、門外空間の存在を感じさせる描写すら皆無となっている。「中国人がもっとも高く評価していた中国の住宅の特徴は、おそらく隠遁できることである。外界からは、境界に隣接する樹木の頂しか見えないのである。」と語ったのはアンドリュウ・ボイド氏であるが、そうした中国家屋の特徴を家屋の内側から完璧に描いてみせたのが、李賀のこの二つの詩であると言えよう。

李賀と閉鎖空間（家屋）との一体感を象徴するように、屋内描写（第五―八句）は李賀の精神との密接な関わりの中で描かれている。露の冷やややかさ・虫の音・室内の寒さ

は、李賀の孤独で研ぎ澄まされた精神。消え入りそうな燈や風にはためくとばりは、李賀の揺れ動く心。李賀の精神は家屋の内に溶け込み、一体化する。李賀はその中で自己の心情を吐露し始めるのである。長安から昌谷へ戻って早や百日（第十一・十二句）。読書に明け暮れる生活は良いが、恨みがましい詩ばかり書き綴って、すっかり老けこんでしまった自分の顔。ここには、閉じた空間の内に守られているという安らぎと共に、昌谷という狭い空間に追い込まれてしまった自分への苛立ちがある。これは「閉門」にまつわる一連の行為が李賀の本意では無い事、言い換えれば、李賀が已むを得ざる状況の下で「閉門」という行動に走った事を示すものである。

以上、『始為奉礼憶昌谷山居』と『秋涼詩寄正字十二兄』の中に「閉門」の描写を見て来たが、二詩の間には様々な共通点が見られた。まず第一には、「閉門」の描写が詩の冒頭に位置している点(①)。第二には、「閉門」という行為が已むを得ざる状況の下で主体的になされている点(②)。第三には、「閉門」という行為が家屋を閉鎖空間として完結させる行為である事を明確に意識している点(③)。第四には、「閉門」によって門外空間の存在が精神的に排除されている点(④)。第五には、「閉門」が精神的解放の

前提条件となっている点(⑤)。第六には、閉門後の家屋描写が家屋と李賀との深い一体感を象徴している点(⑥)である。

以上六点のうち、①は「閉門」描写の共通性を、②は「閉門」に至った理由の共通性を、③④は門の閉鎖性に關する李賀の認識の共通性を、⑤⑥は閉鎖空間(家屋)内での李賀の心理の共通性を示している。

b、李賀と同時代の詩人の場合

韓愈・孟郊・盧仝・賈島の詩の中で、A項に該当する門の用例は七例。その内、「閉門」という行為が作者の主体的な行為として描かれているものは二例しかない。

① 僕射南陽公 僕射 南陽公

宅我睢水陽 我を睢水の陽に宅せしむ

篋中有余衣 篋中に余衣有り

盎中有余糧 盎中に余糧有り

閉門・讀書史 門を閉じて書史を読めば

窗戶忽已涼 窓戶忽ち已に涼し

全唐詩卷三三七

② 揚州蒸毒似燂湯 揚州の蒸毒 湯を燂むるに似たり

客病清枯鬢欲霜 客病清枯 鬢霜ならんと欲す

且喜閉門無俗物 しばらく門を閉じて俗物無きを喜こ

四肢安穩一張牀 四肢安穩 一張の牀

全唐詩卷三八七

①は韓愈の『此日足可惜贈張籍』の中盤部分、汴州の反乱後、漸く落ち着きを取りもどした韓愈の日常生活の描写である。詩の眼目は、汴州の反乱前後の状況を語る事、去り行く張籍を惜しむ事に置かれているため、「閉門」後の韓愈の様子についてはこれ以上詳しく述べられていない。が、これだけの描写からでも、「閉門」という行為が家屋の閉鎖性を完結し、家屋の内に韓愈と書物との一対一の世界を展開する前提条件となっている点だけは充分に読みとることができる。

②は盧仝の『客淮南病』の全文。病氣となった盧仝は喜々として門を閉ざす。盧仝は「閉門」という行為によって、外的世界からの他者の侵入を拒絶し、閉鎖空間となった家屋の内でも身も心も伸びやかに解放しようとするのである。

③④には、李賀詩と共通の認識が三つほど認められる。「閉門」という行為が、家屋を閉鎖空間として完結させる行為であることを意識している点(③)、「閉門」が心的解放の前提条件となっている点(④)及び、閉門後の家屋描

写が、和み行く精神との一体感の中で綴られている点(⑥)

の三点である。これは、門の閉鎖性に関する認識の一部及び、閉鎖空間—家屋—内での李賀の心の動きが、同時代の詩人と共通するものであったことを示すものである。が、家屋内での心的解放度の深さ(⑤)及び、家屋と作者との精神的一体感の深さ(⑥)という点に關して言えば、描写の細やかさという点から見ても、李賀詩—特に『始為奉礼憶昌谷山居』の方がより深く、かつ自覚的に描かれている。これは、門外空間と作者との關係の相異から来るものであるろう。韓愈・盧仝の詩には見られず、李賀詩には共通して見られた①②④の要素は、何れも門外空間を疎外空間として意識し、排除しようとする李賀の意識の表れである。これに対して韓愈・盧仝の詩には、門外空間との精神的対立感極めて薄い。盧仝に於ては、「閉門」による排除の対象が「俗物」にまで矮小化されてしまっているのである。

李賀の「閉門」描写の特異性は、「閉門」が、門外空間との強烈な対立感の下で行われている点にある。この対立感が李賀の心に何時頃芽ばえ、その後の李賀の人生にどのような影響を及ぼしたかについては、次章で考えてみたい。

三、門の透過性に注目した表現

a、李賀の場合

中国建築に於ては、庶民の住居から宮殿及び都市に至るまで、その基本的構造は同じである。故に李賀詩に於ては、宮殿の門及び城門もまた、家屋の門と同様の機能を持つものとして描かれている。

①洛風送馬入長関 洛風 馬を送りて長関に入る

関・扇・未・開・逢・瘦・犬 関扇未だ開かざるに瘦犬に逢ふ

『仁和里雜叙皇甫湜』李賀詩集卷二

詩そのものは元和八年十月の作であるが、右の二句は、科挙受験に上京した元和五年当時の事を回想したものである。

「関扇」とは門扉のこと。二句目の典故は『左伝』の「国犬之瘦、無不噬也」（哀公十二年）と、宋玉の『九弁』「豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重、猛犬狺狺而迎吠兮、関梁閉而不通」である。

「洛陽の風に送られて馬に乗り、長安に来てみれば、宮門の扉も開けないうちから狂った犬に吠えたてられた。」ここで門は、官僚社会という、一つの閉鎖空間と李賀とを結ぶ唯一の接点として立ち現れている。科挙受験のために上京した李賀は、一部の人間の害意のために高級官僚社

会の門を閉ざされ、侵入を拒絶されてしまう。高級官僚を夢見て上京した李賀にとって、官僚社会そのものであった大都市長安は、この時から巨大な疎外空間として李賀を圧迫する存在となったのである。

科挙受験を断念した李賀は、一旦昌谷へ帰るが、翌元和六年、再び上京して奉礼郎となる。先に見た『始為奉礼憶昌谷山居』には、役所から帰るとピタリと門を閉ざし、家屋の内で徐々に自分を取りもどして行く李賀の姿が描かれていたが、これは巨大な疎外空間の中で働かねばならなかった李賀にとって、家屋が唯一の砦であった事を示すものである。劉衍の李賀^⑤年表では翌元和七年の作と推定されている『公無出門（公門を出づる無かれ）』には、長安の家屋の門外空間に対して抱いていた李賀の強迫的な心象風景が描き出されている。

②天迷迷 天は迷迷

地密密 地は密密

熊虺食人魂 熊虺 人魂を食い

雪霜断人骨 雪霜 人骨を断つ

啾犬狺狺相索索 啾犬 狺狺相索索

舐掌偏宜佩蘭客 掌を舐むるは偏に佩蘭の客に宜し

李賀詩集卷四

第五句の典故もまた宋玉の『九弁』である。「天も地も暗く低く垂れ籠める中、私を含めた潔白な君子たちを食い千切らんと、熊虺・噬犬といった怪物たちが彷徨いている。」詩の後半には「我馬に跨ると雖も還るを得ず」の句も見られ、李賀がこの強迫的疎外空間から去るに去れない状況にあった事が記されている。『題婦夢』（巻四）に「家門厚重、望我飽飢腹」とあるように、扶養家族を背負った李賀には、長安に少しでも長く留まらねばならない理由があったのである。が、長安の家屋は、李賀を守るに十分なものではなかった。元和八年の作『春婦昌谷』には、疎外空間―長安の圧迫に抗しきれなくなった李賀の心情が綴られている。

◎京国心爛漫 京国 心爛漫

夜夢帰家少 夜夢に家に帰ること少なり

発・勅・東門・外 勅を東門の外に発すれば

天地皆浩浩 天地 皆浩浩

李賀詩集卷三

『始為奉礼憶昌谷山居』に於ては、長安の家屋で故郷の我家を思う事が李賀の心を解きほぐす鍵であった。が、右の前半二句には、長安の生活に疲れるに従い、故郷へ帰る夢も見る事の少なくなった李賀の姿が描かれている。これ

は、李賀と長安との緊張関係が、家屋の内に於ても緩和されなくなった事を示すものである。家屋は、外的世界（長安）の圧力から李賀を守る能力を失ったのである。李賀は病を理由に職を辞し、故郷へ帰る決意をする。

長安では「天迷迷、地密密」（『公無出門』）と映っていた天地が、長安の門外では急に広々としたものとして李賀の目に映る（後半二句）。全ての認識がそうであるように、空間認識もまた、感情というフィルターを通して行われる。狭さの感覚は、空間から疎外された者が感じる圧迫感の表れであり、広さは逆に解放感の表れである。⑩「天地皆浩浩」という感覚は、東門内の空間―長安が李賀にとって如何に狭く感じられていたかを、つまりは長安が李賀を如何に強く圧迫していたかを、裏返しに示している。

⑩少健無所就 少健 就く所無く

入・門・媿家老 門に入りて家老に媿づ

聴講依大樹 講を聴くに大樹に依り

観書臨曲沼 書を観るに曲沼に臨む

知非出柙虎 柙を出づる虎に非ざるを知り

甘作藏霧豹 霧に藏るる豹と作るに甘んず

韓鳥処繒繳 韓鳥 繒繳に処り

湘簾在籠罩 湘簾 籠罩に在り

狭行無廊路 狭行 廊路無し

壮士徒輕躁 壮士 徒らに輕躁

李賀詩集卷三

右は『春婦昌谷』の結びの部分。柀は檻。六句目の典故は『列女伝』陶答子妻伝の「南山有玄豹、霧雨七日而不下食者何也。欲以沢其毛而成文章也、故藏而遠害。」隱遁する喻として良く用いられる。緡繳は罽繳、いぐるみの事。

儻は、はや、鮎に似た鯉科の川魚。

李賀が逃げ込んだのは、故郷昌谷の家屋を中心とした狭い空間。「聴講・觀畫」の語からは、この狭い空間に守られて心の安定を取りもどした李賀の姿と、せめて精神的空間を拡張せんとする彼の意志を読み取る事ができる。が、その一方で李賀は、自分の生き得る空間が徐々に狭められて行く現実を、焦りとも諦めともつかぬ感情で見つめているのである。「檻を破つて飛び出す虎の柄ではない、自分は、霧に隠れて我身を養う豹たるに甘んずるしかない。広い所へ出ようとすれば、韓鳥や湘儻の様に搦め捕れてしまえばかり。このまま狭い道を歩いて行けば、広い通りに出る事は無いであろう。だからと言って、壮士の気概を振りかざしても、徒らに空騒ぎするばかりである。」

右の様な心の揺れは、前章で見た『秋涼詩』の中に、よ

り拡大された形で現れている。昌谷滞在三ヶ月余り。自ら家屋の門を閉ざしながら、その一方で詩作三昧のうちに老いて行く自閉的日常に苛立つ李賀。李賀のこの苛ちは、自己の存在意義を確認したいという内的欲求の表れである。が、世界の中心、長安から遠く離れた昌谷の地は、李賀の欲求を満たすには狭すぎる空間であった。

家族の扶養という経済的圧迫と内的欲求に突き動かされて、同年十月、李賀は早くも職を求めて洛陽へ旅立つ事になる。昌谷及び昌谷の家屋は、外的世界の圧迫から李賀を守り、彼の心を和ませてくれる空間であった。が、それも一時の事。この早過ぎる旅立ちには、昌谷もまた、李賀の真に生き得る空間ではなかった事を示している。洛陽から長安へ、そして翌年には潞州（山西省長治県）へと、李賀の流浪が始まる。

隴西長吉摧頽客 隴西の長吉 摧頽の客

酒闌感覺中区窄 酒闌にして中区の窄きを感覺す

『酒罷張大徹索贈詩時張初效潞幕』李賀詩集卷二

右は元和九年の作。中区とは中国Ⅱ世界。窄の字には、せまい（狭）の他に、せまる（迫）の意味がある。友人張徹を頼って潞州にたどり着いた李賀は、再会の宴で急に世界が狭くなったような感覚に襲われる。この感覚は、李賀

が自己の存在する空間全体に強烈な圧迫感を感じている証である。昌谷の家屋を出て以来の彷徨の中で、李賀はついに世界全体を敵にまわす事になってしまったのである。李賀が心を溶けこませる事のできる空間は、最早どこにもない。

世界全体が疎外空間と化した中で、李賀は元和十一年秋まで潞州に留まり、同年冬、昌谷の家屋にて病没する。

李賀詩に於ける「門」の描写の特徴をまとめてみれば、門が常に二つの対立する異質な空間の接合点として現れている点が挙げられるであろう。言い換えれば、門は常に、李賀と彼を疎外する空間との接点もしくは境界線として立ち現れていた。①では、李賀と官僚社会との対立、②③では李賀と長安との対立を、門の描写は浮き彫りにする役割を果していた。

李賀自身が門を出入りする描写は、④⑤⑥⑦⑧の他に、①②の例も含めると全部で六例。この内、門の内と外とに對立的な空間の存在を感じ取っていないものは、⑧の一例のみである。しかも、他の五例が科挙受験断念後の李賀と門との関わりを描いているのに対して、⑨は「驅馬出門意、牢落長安心」というように、受験のために胸を膨らまして上京した當時を回想として描いている。これは、科挙受験

断念前の李賀には、世界が均質な空間の広がりとして受け止められていた事を示すものである。受験断念後、世界は、自己を疎外する空間と自己を守る空間―主に家屋―とに分裂し、そうした中で二空間の接点としての門の機能が、李賀の目に急速にクローズ・アップされて行ったのである。前章で見た「閉門」描写の内に秘められた強烈な排他性及び、その反動としての閉鎖空間との深い一体感も、全てこの延長線上にある。

b、李賀と同時代の詩人の場合

韓愈・孟郊・盧仝・賈島の詩の中で、B項に該当する「門」の用例は三十六。その内、異質な二空間の接合点として「門」を描いているものは韓愈に二例、孟郊に一例の計三例あるのみである。

①君門不可入 君門入る可からず

勢利互相推 勢利互いに相推す

借問讀書客 借問す 讀書の客

胡為在京師 胡為れぞ京師に在る

韓愈『将婦贈孟東野房蜀客』全唐詩三四〇

②出門即有礙 門を出づれば即ち礙有り

誰謂天地寬 誰か謂ふ天地寛しと

有礙非退方 礙有るは退方に非らず

長安大道傍 長安 大道の傍ら

小人智慮險 小人 智慮險しく

平地生太山 平地に太山を生ず

孟郊『贈別崔純亮』全唐詩三七七

①は貞元十七年、韓愈が身言書判科を落第した時の作である。「君門不可入」の句は、高級官僚社会と韓愈との唯一の接点である門が、韓愈の侵入を拒むものとして描かれている点に於て、李賀の「闔扇未開逢狻犬」(①)に近いものである。が、李賀が受験断念以後、長安を疎外空間として強く意識したのに対して、韓愈は落第以後、箕山の麓に隠棲して自適の生活を送ったという許由に習い、長安を去る決意をするのである。「潁水清且寂、箕山坦而夷、如今便当去、咄咄無自疑」と語る韓愈の口調には、疎外空間から脱出しようとしている者の切迫感はない。

②の六句目「太行」とは、河南・河北・山西省に渡る大山脈の事。「家屋の門を出れば、必ず何らかの防害に出会う。長安は小人どもの悪意に満ち溢れ、その害意の險しさは大山脈の如くである。」長安に対する孟郊のこの心象風景は、李賀の『公無出門』に近いものである。が、李賀が『公無出門』の後半で、長安を去ろうにも去れない窮状を訴えたのに対して、孟郊は長安脱出の希望を露ほども語ら

ない。むしろ害意に満ちた長安の中で、良い友人と巡り会えた喜びを語る方へと話を展開して行くのである。

①では門の内側に、②では門の外側に、共に作者と対立する空間の存在が感じ取られていたが、共通するのは、韓愈も孟郊もそうした自己の空間意識に追いつめられて行く事が無いという点である。韓愈は『秋懷詩十一首』其三(全唐詩卷三三六)の中で「学堂日無事、驅馬適所願、茫茫出門道、欲去聊自勸」と呟く他は、自在に門の内外を入りしているし、孟郊も②以外の詩の中では、門外空間の害意について語っていない。疎外空間の存在を「門」の描写の中で浮き彫りにしつつ、生涯その圧迫に苦しんだ李賀との相異はここにある。

四、おわりに

李賀の門に対する強烈な意識は、その特異な空間認識から来るものであった。一部の人間の害意によって科挙受験を阻まれて以後、世界は対立する二つの空間——李賀を守る小さな空間(主に家屋)と、それを取り囲む巨大な疎外空間——に分裂する。この対立的な二空間の唯一の接点として、門の存在は李賀の注目を強力に引きつけたのである。

門の描写を辿る事は、空間的側面から李賀の人生を辿る事でもあった。疎外空間による圧迫、経済的圧迫、更には

自己の存在意義を確認したいという内発的欲求等に突き動かされて、対立的な二空間を往復する李賀。が、長安の家屋や昌谷の家屋は、李賀の心を一時憩わせる事はできても、李賀の生を完全に受け止めるためには狭すぎる空間であった。この家屋の無力さが、対立する二空間のバランスを徐々に崩し、ついには世界全体が疎外空間と化すまでに李賀を追い込んでしまったのである。

「牛鬼蛇神」等の息づく独自の詩的空間の創造は、こうした李賀の空間意識と無縁ではない。現実空間内での疎外が強まれば強まるほど、自己の生き得る空間を求めて、李賀は自己の内奥に切り開かれた詩的空間へと没入して行ったのである。詩的空間については後に詳しく考察してみたい。

〔注〕

- ① オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』大塚・池川・中村訳、せりか書房、一九八五年、二二頁。
- ② 大室幹雄『劇場都市』三省堂、一九八五年、二七〇頁。
- ③ ボルノウ、前掲書、一二五頁。
- ④ ボルノウ、前掲書、一四六頁以下参照。
- ⑤ 『将養』には門の出入りが具体的に記されていないが、旅立ちの暗示として門が描かれているためB項に入れた。

⑥ Aには、閉門の他、「有客至門、我不出迎、客去而嘆」（韓愈『剝啄行』全唐詩卷三三九）等の描写も入る。Bには、出門・入門・敲門等が入る。「柴門掩寒雨」（賈島『酬姚少府』全唐詩卷五七二）等の描写は、門の閉鎖性が明確ではないのでC項に入れる。

⑦ アンドリュー・ポイド『中国の建築と都市』田中訳、鹿島出版会、昭和五十四年、八九頁。

⑧ 大室幹雄、前掲書、二五八―二六〇頁。

⑨ 劉衍『李賀詩伝』所収、山西人民出版社、一九八四年。

⑩ ボルノウ、前掲書、二二七頁以下参照。

⑪ 杜牧『李長吉歌詩叙』。